



写真：サンタリタ集落生活改善グループ会議風景

イフパット だより

～農民参加なくして農業なし～

特大号:JICA草の根技術協力「コスタリカ国生活改善アプローチによる農村開発モデル事業」を終えて

イフパット便り第22号に寄せて:

本22号は、20号において紹介したベトナムの草の根事業と同様、当NPOイフパットがJICA（国際協力機構）の委託事業として実施したコスタリカ国における草の根技術協力の終了時報告です。特大号としてプロジェクト活動に参加したイフパット職員の率直な感想を書いてもらいました。

草の根プロジェクトの実施には長野県松川町の役場を始め、町民の皆様の多大なご理解とご協力により実施することが出来ました。本紙面をお借りし、改めて感謝申し上げる次第です。

編集文責：永井 和夫

プロジェクトを終えて

プロジェクトマネージャー 永井 和夫

NPO法人イフパットと生活改善アプローチ：イフパットは2006年に設立され、2011年度からJICA筑波の委託事業として、中米カリブ・南米地域及びアフリカ地域を対象とする生活改善アプローチに関連する本邦研修を運営しています。同時に同研修の中米カリブ地域在外補完研修にも参加してきました。また、中南米地域のJICA技術協力プロジェクトに、生活改善等の参加型村落開発短期専門家を派遣しています。このような活動の中、生活改善アプローチ活動に関する開発途上国における技術指導、研修事業の運営等を行う人材が育ち、生活改善アプローチをNPO業務の一つに位置付けるまでになりました。現在も、5名の職員が生活改善アプローチを中心とした参加型村落開発の事業に関係しています。

帰国研修員の活動：イフパットがJICA研修を担当する前ですが、2009年の「中米カリブ地域の住民参加型農村開発ネットワーク運営・管理」研修コース参加者にコスタリカ国農牧省ベラ技師がいました。研修を通じ生活改善アプローチの琴線に触れた彼女は、帰国後ボランティアで生活改善アプローチによる農村開発活動をコーヒー生産地帯ロス・ラゴス入植地でア

マグロ協会 (la Asociación Mixta Agroecológica)

を対象として2010年から活動を開始しました。ロス・ラゴス入植地はINDERの開設したコーヒーの入植地でしたが、遠隔地でありコーヒーの作柄も悪く、多くの入植者が去り、ベラさんが活動を開始した時、5家族が残るだけでした。ベラ技師の活動は、いわゆる改良カマドの普及とか、農産加工による生計向上と言った直接的支援では無く、日本で学んだ「考える農民」の育成でした。彼女の努力は、アマグロ協会の会員が



写真1 農牧省ベラ技師

『生活改善は「私たちの学校」である。読み書きを学ぶように、「保健衛生や栄養、農業の知識を学ぶことで日々の問題を協力しながら解決し、貧しくても何かできることを実感して来た。』』と言うように変化しました(プラビダNo.4 小林より)。彼らは、自ら生活改善アプローチは「考え方の変革(Cambio de Mentalidad)」であると述べています。

目次

・特大号:

- ① プロジェクトを終えて P1
プロジェクトマネージャー 永井和夫
- ② 囲み「日本側協力機関 長野県松川町」 P4
- ③ - 担当分野からの経験 -
・現地調整員/生活改善ファシリテーター① 小林沙羅 P5
・現地調整員/生活改善ファシリテーター② 宮崎雅之 P6
・生活改善技術短期専門家 和田 彩矢子 P7
- ④ コスタリカ青年海外協力隊員 錦織紀子 P8
- ⑤ プロジェクト活動の軌跡 (写真集) P9

アマグロの経験を全国に：アマグロ協会の活動は、全国的に知れ渡ることとなり、日本からも多くの研究者、関係者が現場視察を行うようになりました。日本の研究者はアマグロ協会の成功、そしてや



写真2 事前調査でアマグロ協会を訪問（2014年10月）
はりJICA研修の帰国研修員である農牧省ヘイネル及びアナベル技師のコスタリカの他地域での活動を高く評価します。農牧省はその成果を全国に普及すべく、ベラ、ヘイネルそしてアナベル技師が中心となって進める『全国普及実証プロジェクト』が計画されます。実証プロジェクトはFITTACORI（農牧省の農牧技術研究普及振興強化基金）に申請され、2014年度案件として承認され「研究と行動プロセスを通じた－農牧省地域の生活改善アプローチの実証プロジェクト」として活動が開始されました。農牧省は全国を8地域に分けています。各地域に1カ所の実証地域を設け、事業に関心のある組織からファシリテーターの参加を願い、先ずは生活改善ファシリテーターの育成研修から活動が開始されました。いち早く手を上げたのがアラフエラ州オロティナ市です。

オロティナ市の市長、マルゴット女史は2013年度のJICA研修：中米カリブ地域「生活改善アプローチを通じた農村開発」の帰国研修員です。同じオロティナ市に事務所のあるINDERの中部太平洋地域所長、レオネル氏も2012年度の帰国研修員でした。二人が中心となり、市役所・INDER・保健省職員からなるファシリテーターチームが構成されました。全国実証プロジェクトとして最初に手を上げたオロティナ市でしたが、日本の農村を舞台に発展した普及手法を、中米地域という文脈でいかに適用するかについて私たちNPO法人イフパットが、長野県松川町で現在も活躍する元生活改良普及員米山由子さん（プロジェクト開始当時は松川町議会議長）と多くの生活改善グループそしてグループ員皆様の協力を得て、活動に手を差し伸べることになりました。

プロジェクト概要：本プロジェクトは2016年2月から開始され、2019年4月、3年3ヶ月の活動を終了しました。コスタリカ国の首都サンホセから西へ50km、

標高200m（湿潤熱帯）のオロティナ市にある2つの入植地（サンタリタとセバディージャ）を活動対象としました。両入植地は農村開発庁

（以下INDER）の設定した入植地ですが、1区画はサンタリタが300-1000m²、セバディージャは1000-3000m²で農業

で生計を立てるには狭く、ほとんどの家庭はオロティナ市などの市街地に日雇い労働に出るか、多くの主婦は女中さんとして収入を得ています。住むだけでは広すぎる敷地はほとんど活用されていません。この2村を対象として、プロジェクトが開始されました。

プロジェクトの活動概要（PDMの一部）を表1.に示しています。プロジェクト目標は「住民の生活の質が改善し「住居」「健康」「教育」「子育て」「家計」及び「家族関係」が向上する。」としました。「住居」から「家族関係」まで多様な、そして非常に曖昧な目標です。私たちは、この曖昧さこそ、生活改善アプローチによる農村開発の特徴と考えています。生活改善アプローチによる農村開発も参加型開発の一つです。関心のある人が集まり生活改善の活動グループを形成します。改善の最初の活動は参加する各個人の関心と必要度によって異なります。個別の改善活動を通じ、その経験をグループの集まりで発表し、同時に他のグループ員の活動を知り、意見交換－この集まりを「振り返り」と呼んでいます－の中から、「気づき」が生まれ、自分の力で改善が出来るという「意識の変革」が生まれます。



図1 プロジェクトサイト：オロティナ市と活動対象集落

表1. プロジェクト概要（目標と活動）

1. 事業名（事業実施期間）	コスタリカにおける生活改善アプローチによる農村開発モデル事業（2016.2-2019.4）
2. 事業実施団体名	非営利活動法人 国際農民参加型技術ネットワーク（NPO法人イフパット）
3. ターゲットグループ	モデル集落（オロティナ市入植地サンタリタ村、セバディージャ村）の住民（350世帯：人口約1050人）
プロジェクト要約 (Project Summary)	活動 (Activities)
上位目標（Overall Goal） コスタリカの農村地域の住民の生活の質が向上する	
プロジェクト目標（Project Purpose） オロティナ市のモデル集落住民が生活改善アプローチによるグループ活動を実施し、住民の生活の質が改善し「住居」、「健康」、「教育」、「子育て」、「家計」及び「家族関係」が向上する。	
アウトプット（Output）	
1. 生活改善ファシリテーターチームの育成 ：オロティナ市の生活改善ファシリテーターチームの生活改善技術及びファシリテーション能力が向上する	1-1.生活改善ファシリテーター育成研修（含む本邦研修） 1-2.対象集落におけるファシリテーターの活動計画策定・実施（生活改善アプローチの説明、実践グループの形成、住民による課題抽出、活動計画作成、活動実施支援） 1-3.生活改善ファシリテーター活動の自己評価チェックリストの作成とチェックリストに基づく評価の実施
2. モデル集落における生活の質の改善 ：オロティナ市のモデル集落住民グループが生活改善活動を日々の生活の中で実践し、「住居」、「健康」、「教育」、「子育て」、「家計」及び「家族関係」のような生活の質が改善する。	2-1.モデル集落住民による生活改善アプローチの学習（含む本邦研修） 2-2.ファシリテーターチームの支援を受けたモデル集落住民による生活改善活動の計画策定・実施 2-3.モデル集落住民による生活改善活動の振り返り
3. 生活改善活動の持続性確保に向けた協力体制の確立 ：農牧省（MAG）の実証プロジェクト全国8地域※ ¹ のファシリテーター及びその対象集落住民に向けて、オロティナ市のファシリテーターチーム及びモデル集落グループの経験が発信・共有・認知され、全国的なネットワークが形成されることにより、モデル集落グループの更なる意欲及び改善活動能力が向上し、自律的活動が継続する。	3-1. MAGが実施する全国8地域のファシリテーターチーム及び活動住民とオロティナ市ファシリテーターチーム及びモデル集落グループの経験共有 3-2.モデル集落及び農牧省の8地域の集落における生活改善アプローチ実践を体系化する事例教材作成 3-3.全国8地域のファシリテーターチームを対象にした研修の実施（含む本邦研修） 3-4.モデル集落グループ対象に行う他地域の経験共有活動のモニタリングと振り返り

個別活動を通じて生まれた「意識の変革」を力として、グループ全体の生活改善活動へと進めます。グループが農家の集まりであれば、外観が悪く廃棄を余儀なくされる果物の農産加工であったり、グループでの養鶏事業などが考えられます。また、戦後直ぐの日本の農村では共同炊事とか育児などが行われました。グループ活動による生活の質の改善も、グループそしてグループ員の置かれた社会経済環境によって異なります。どのような内容の改善活動を行うか、その決定はグループ員間の話し合いで決まります。目標設定のイニシアティブは生活改善グループにあります、そのためにプロジェクト目標には生活の質の改善に関係する多様な改善項目を記載しました。

プロジェクト成果は3つで、①ファシリテーターの育成、②生活改善グループの育成を通じたモデル農

村の生活の質の改善、そして③他活動地域との協力体制の確立です。特に重要なのは③の他地域との協力体制の確立です。他の生活改善グループとの経験の発表、意見交換の場—これも広い意味での「振り返り」と見ることが出来ます。—を設けることにより、新たな「気づき」が生まれ、より質の高い改善活動へと繋がります。生活改善活動を始めるに当たり、いろいろなワークショップを行います。その中の一つに「幸せの木」というワークショップがあります。自分にとっての幸せな生活とは何か。幸せな生活を実現するためには何が必要で、そのためには何を行わなければならないのか。各自が幸せの木を作り大きな目標とします。自分が目標に置く幸せな生活に近づくため、個人レベル、グループレベル、そして地域レベルでの「振り返り」が重要で、他地域との協力体制が不可欠です。

プロジェクトの3つのチャレンジ：この草の根技術協力には、今考えると3つのチャレンジがありました。一つは、すでに説明しましたが、プロジェクト目標に多様な活動を記載したことです。

第2のチャレンジは、非農家を対象としたことです。生活改善アプローチによるプロジェクトは、今まで農村の農業者家庭を対象としてきました。本プロジェクトはINDERの設定した入植地ですが入植者は農業者ではありません。果たして生活改善アプローチは非農家の家庭で機能するのか、どのような改善活動を行われるのか、全く不明の中でプロジェクトを開始しました。

そして第3のチャレンジはプロジェクトのカウンターパート機関として市役所を選んだことです。市役所を選んだ第一の要因は、もちろん日本で生活改善の研修を受けたマルゴット市長の熱意と関係しています。しかしプロジェクトを進める中で、市役所こそ生活改善アプローチによる村落開発のカウンターパート機関として最適と考えるようになりました。市役所は、今まで参加型開発の経験を全く持っていませんでしたが、住民にとって最も身近な存在です。市役所は省庁とは異なり、経験が無い反面、どのような分野の活動にも対応が出来ます。特に、ファシリテーターとして最も重要な「寄添い」活動を行うのに最適な機関と言うことが出来るのではないのでしょうか。

プロジェクトの持続発展性：最後にプロジェクト活動において最も重要な、プロジェクト終了後の持続発展性です。プロジェクト終了時の報告会において、次の3点を持って説明しました。

1. **関係機関：**市役所、INDER、農牧省、保健省ともにオロティナ市の属する開発テリトリー全体への活動展開を計画し一部実行に移している（隣町サンマテオ市におけるファシリテーター育成研修の開始）。

2. **市役所：**既に2020年までの事業展開に必要な予算を確保している。ただし、2020年2月の市長選挙の結果が重要。

3. **生活改善グループ：**改善グループの実施する、集落清掃活動、高齢者サービス活動は市役所を巻き込んだ事業であり、新市長も彼らの活動を見捨てることは出来ない。

プロジェクトは終了しましたが、コスタリカ国において生活改善アプローチによる農村開発事業そして活動は今後とも継続・発展、そして定着します。

日本側協力機関 長野県松川町

・松川町は、従前からJICA生活改善研修の現地研修を積極的に受入れていただいております。研修に協力をお願いしていた元生活改良普及員米山由子さんは、松川町町議会議長（当時）でもあり、町長の理解も加わり、本草の根技術協力の協力機関として活動していただけることとなりました。具体的には、短期専門家派遣、そしてコストリカからの研修員受入です。そして最も重要なこと、それは、一部を松川町役場独自の予算により短期専門家派遣していただいたことです。

・また、本草の根技術協力の協力機関になることにより、松川町と中米コスタリカ共和国は交流を深め、2020年東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンとなりました。



米山元生活改良普及員



松川町高坂教育長



栄養士の大平先生



まし野グループ佐々木さんと木下さん



松川町役場矢沢係長



大原さわかグループの岡島さん

—担当分野からの経験—

「考えるファシリテーター」の成長

現地調整員/生活改善ファシリテーター
(2016.4-2017.3) 小林 沙羅

「生活改善アプローチに出会い、住民が決めて行動すること、学ぶことで変化が起きるとわかった。」
当事業のカウンターパートの一人である保健省のエリーがそう言った表情には確信が満ちていました。

当草の根事業を実施する中で一番苦労したのは、ファシリテーターの「態度の変容」でした。「自分は農業の専門家だから農業技術を教えて、種子や肥料を配布することが仕事であり、農家の声を聞くことではない」言い切って去ってしまう農業改良普及員もいました。

エリーは、事業開始当初一緒に村に行き家庭訪問をしても、家の周りの汚水が溜まっているところを探しては「病気の発生源になる。早く清掃してください」と住民に指示ばかり出していました。村の衛生状況を改善し、デング熱などの発症率を減らすのが彼女の仕事であり、保健省の蚊を減らすキャンペーンなどとても真面目に取り組んで来ました。にもかかわらず毎年雨季になると相変わらずデング熱は発症し、事業実施時に流行したジカ熱にかかるグループ員もいました。エリーと一緒に活動していると「自分がこんなに指示しているのに、キャンペーンもしているのに現状が何故変わらないのか？」という疑問を漏らしていました。



写真1: (エリー) 改善活動を自宅で実践した女性の発表に立ち会う

そのような問題意識を持つ中、住民自身が主体となり課題解決をする生活改善アプローチの考え方を学び、村の人たちと話し合いやワークショップを重ねる中で彼女の村の人たちへの接し方は「ファシリテーター」に変わっていきました。指示や命令がなくなり、穏やかな表情で傾聴するようになり、また保健のプロフェッショナルとしての考え方を押し付けるのではなく「～についてはどう思いますか？」と提案型の話し方になりました。彼女が「住民が決めて行動し学ぶことで変化が起こる」と語りだした時、村の人たちもまた彼女のことを「説教臭い役人」から、固有名詞で名前を呼びかけ信頼するようになる変化が見られました。

市役所の予算計画担当のジェフリーは、生活改善アプローチを理解しながらも自分の通常業務が現場に関わるものではないことから当初戸惑いを見せていました。ともかく村に行くことから始め、実際の女性たちによる改善活動を目の当たりにし、振り返りなどを担当することで、「今まで市役所の職員として、村に橋を建設するなどの仕事に関わることはあったが、実際村の人たちに会い、話を聞く機会はなかった。」と村の女性達との関わり合いにダイナミズムを感じるようになっていきました。女性たちがグループのアクションプランを作る段階で、計画官としての経験が活かせると考えジェフリーに講師を頼んだところ、集落の活動には精密すぎる行政計画のような計画策定を紹介してしまったのですが、それでも必死に女性たちに問いかけ、グループで一番大人しい女性の笑顔と発言を引き出すことが出来ました。



写真2: (ジェフリー) グループの計画づくりについて説明

その頃から、対象の女性たちの態度の変化や参加状況を観察するようになり、事業終了時には村に行けない時も女性達から頻繁に相談の電話を受け寄り添いを続けるまでに至りました。グループ員の脱会などの課題に対しても「グループの初期段階は恋人同士と同じで、何もかもが楽しくバラ色に見える。

しかし、グループ活動が進むと運営面でしなくてはいけないことも増え、夫婦と同じで関係性がより深くなることでぶつかることもある。今のグループは成長過程にあり、ほとぼりが冷めるまで少し放置することも必要。」というように、グループを客観的に分析しファシリテーターとして何をすべきか考えるようになりました。

参加型開発の権威ロバート・チェンバースが言う「変わるのは私たち」という、支援する側が支援される側である住民から学び、変わり、成長するというコンセプトは、理念としては簡単ですが、実際に変わるまではある意味での自己否定も含み時間がかかります。当事業を通じてカウンターパート全員が変わったとは言えませんが、一人一人のファシリテーターの素質や問題意識を把握し、ファシリテーターの機微に触れる点を考えながら生活改善アプローチを導入し、常に住民との相互の学び合いを促進しながら定期的にフォローすることが「考えるファシリテーター」の成長に繋がるという示唆を、当事業実施結果から感じています。

「小さな我慢、何のために？そして振返り」 —グループ活動を通じて感じたこと—

現地調整員/生活改善ファシリテーター
(2017.2-2019.4) 宮崎 雅之

プロジェクト開始前、生活改善グループのグループ活動は現地に豊富にある果物を活用したジュースやお菓子等の加工に落ち着くと私は考えていました。しかし、プロジェクト後半を入ると、高齢者が村で孤立せず楽しんでもらうための高齢者向

けレクリエーション、ごみの落ちていないきれいな環境を作るための集落内清掃活動、住民自身が住んでいる集落を好きになってもらうための集落名の入った看板作りといったような私たちの考えもしないようなグループ活動が実現されました。そして、改善活動に必要な資金については、始めは各グループ員が少額支出していたのですが、最終的にはビンゴ、ガレッジセール、バス貸し切りの小旅行の企画等、私たちが全く考えもしない方法で資金を調達するようになりました。

このような成果はグループ員同士に、ある程度の信頼関係が出来たからこそその結果だと思われます。日本では比較的形成されやすい「目的に向かって仲間と一緒に仕事をする」はコスタリカではなかなか成り立ちません。その理由をコスタリカの方に直接聞くと、「足の引っ張り合い」をしてしまうからとのことです。コスタリカでは個を尊重する反面、個人の感情や利害が優先されグループの目標達成が二の次になりがちです。全体のバランスや効果を考えると、自分本位ではなく他人の意見を尊重することも大切です。ひとつのことをみなぎ協力して成し遂げるための最善の選択をすることが、最終的には自分自身のメリットにも繋がるからです。思っていることをすべて表に出すのではなく、少しの忍耐力、ぐっと堪えるといった小さな我慢（Pequeña paciencia）の積み重ねが必要です。「あの人は文句や噂話ばかりする人だけではない、あの人はあの人」と相手を理解し、慣れ、認めるようになることが、「あの人と意見が合わないからグループから脱退する!」、といった決断ではなく、長期的な継続した活動が可能となり、連帯感が生まれ、グループ員同士の信頼関係構築に繋がったと言えます。



写真1：話が脱線しないように会合の目的と議題を見えるところに貼り付ける。



写真2：忘れないうちに帰りのフェリーで研修旅行の振り返り

また、これは生活改善グループとファシリテーターチームの両方に言えることですが、各活動の目的の明確化と振返りの重要性です。というのも、他地域の生活改善グループ活動視察のための研修旅行や発表会が単なるイベントとなってしまう、良かったね、楽しかったね、大成功だったね、で終わります。「このプロジェクトの目的は？」という質問に対して「生活改善アプローチを実施すること。」、「研修会の目的は？」に対し「研修会を開催すること。」という回答が返ってきます。何のために？

(¿Para qué?)、そして改善できる点は？(Punto de Reflexión)を習慣的に確認・共有することがコスタリカの今後の成長において、大きなカギとなってくるでしょう。コスタリカの大多数の方がこの小さな我慢、何のために？そして振返りを出来るようになると、より素晴らしい国になると信じています。

「お金儲けではなく、人の役に立つ事が自分達にとっての生活改善」

～個人主義から地域に目を向けた母さん達～

生活改善技術専門家 和田 彩矢子

私は生活改善分野担当短期専門家としてこの3年強、5回(各2週間)赴任し、主にファシリテーターチームに対するツール演習、寄り添い活動や長期的目標設定の指導、オロティナ市以外の実践地域での助言など技術補完を担当しました。

これまで、パラグアイなど、土間の直火カマドで目の痛さをこらえ調理し、地面に置いた桶で洗濯する痩せた母さんたちと活動することが多かったの、初めてオロティナ市の集落を訪れた際、ふくよかで装飾品の多い女性陣、また古いが雑然と並ぶ洗濯機や調理器具の数々に、随分レベルの高い“貧困層”だなあと感じた事を覚えています。

それでも多分に漏れず、生活改善を学び「政府の支援なしに自分でも何かできる」と気付いたオロティナ市の母さん達はまず自らの生活を振り返り、下図のように「不要な物を買わない」「大好きな炭酸飲料を控える」など個人の小さな生活改善活動から開始しました。

当地は「農村」とカテゴライズされていますが実態は都市近郊であり、活動に参加する母さん達は平日集落外にサービス業などの労働に出ています。農業者であれば家や農作業の改善に男性も巻き込み主体的に取り組む事項も多いですが、非農業者であるため家族の参加が制限され、個人活動も健康維持と家庭菜園に集中するようになります。

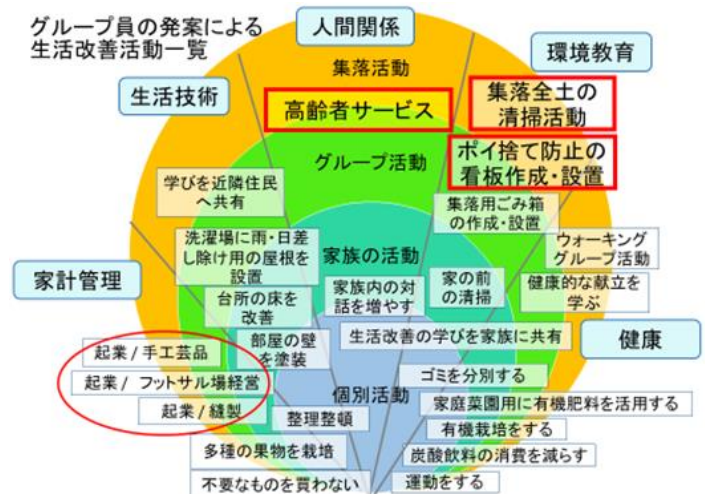


図1：オロティナ市3集落における、グループ員主導で行われた具体的生活改善活動 作成：和田

2年目を過ぎた頃、集落でゴミを散らかす住民が多く、プラスチックごみが散乱しているという点を地域の共通課題と捉え、対策としてゴミ拾いキャンペーンを発案、実施。日本で考えると自然な活動展開ですが、実は個人主義の中南米で、集落全体の生活改善に目を向ける事は難しく、今回のように自発的に地域単位の環境改善のためにグループ活動をする事は非常に稀です。例えばパラグアイでは10年以上料理講習会や有機洗剤づくり、直売所用野菜生産などの活動を重ねるベテラングループでさえ、個人や家族の改善に終始し、地域づくりまで至っていません。これは35年間続いた独裁政権時代に住民の主体性が抑制された事、反勢力の集会防止に住居間の距離を数百mあけて入植させた事などが外部要因として考えられます。ただ入植地ゆえの地域アイデンティティの希薄さ、多少現金収入がある、という意味ではオロティナ市と同じ条件です。唯一、かつ大きな差といえば、普及員による「生活改善アプローチ流寄り添い活動」の有無です。パラグアイでは普及員が研修内容を提案し住民は受け身です。一方当案件では住民の主体性醸成を重んじ、ファシリテーターは住民のやりたい事をサポートする役に徹しました。

この普及手法により自己効力感を高めたオロティナ市の母さん達は、前々から気になっていた集落内の独居老人に目を向け、彼らを再び元気づける事を集落の共通課題として設定します。私は運よく第一回高齢者向けイベントに顔を出しましたが、大爆音でスンバを踊り、グループ員手作りのランチとオロティナ自慢のフルーツ盛りを頂き、多様な手作りプレゼントに歓声をあげる老人たちの嬉しそうな笑顔たるや。「こんなことは初めてで本当に有難い」「久しぶりに笑った」という老人達の横で、それ

以上の笑顔を見せる母さん達。バタバタし、喧嘩をしつつも、企画から実施までやり遂げたという事実が自信につながったようです。

「お金儲けよりも、人の役に立つ事が自分達にとって生活改善だと気付いたの」と迷いなく話すジーナさん(グループ員)。「老人ホームを建てる」というインフラの目標から、考え方を変え「人」にフォーカスし、政府支援を待たず自分達で成し得る事を考え主体的に実践した母さん達とそれを支えたファシリテーターチーム。パラグアイとは一味違う、オロティナらしい生活改善の在り方に、都市近郊でも生活改善活動は必要とされていること、またそのための普及員育成の重要性を実感しました。

今後は、こうした諸生活改善活動を記録化し、市と住民が協力し他地域や後継者に波及することで、生活改善の輪を拡げて頂きたいです。



晴れて夢は叶い、コスタリカで青年海外協力隊員 —元草の根プロジェクト国内調整員—

JOCVコミュニティー開発隊員 錦織 紀子

青年海外協力隊志望の私は2016年4月からNPO法人イフパットに入り、コスタリカ草の根事業の国内調整員を務めながら、コスタリカの生活改善について学んできました。晴れて夢は叶い、2019年1月よりコスタリカでコミュニティー開発隊員として活動しています。

任地であるプンタレナス県パケラ市はコスタリカ北西部にあるニコヤ半島の南東部に位置しています。主な農作物は台湾グアバ、マンゴー、パパイヤで、国内でも暑い地域として知られています。農村開発庁パケラ事務所に配属され、既存の生活改善グループへの寄り添い活動と新規グループを結成し、生活改善を普及することが主な活動です。

任地到着後、既に2年の活動経験を有するリオグランデ生活改善グループの活動に初めて参加した日、グループは集会所作りに取り組んでおり、私も一緒に水回りの掃除をしたり、ペンキを塗ったりしました。集会所は、グループ員自ら修理や掃除を行う約束で農村開発庁が無料でグループに貸しています。配属当初は、机も椅子もなかった集会所ですが、家具職人のグループ員が立派な机と椅子を作り上げワークショップができる環境になりました。

配属から1ヶ月が経ち数回の寄り添い活動を行う中で、現地ファシリテーターは常にグループに寄り添い、真面目に取り組んできたことがわかりましたが、その結果グループ員がファシリテーターなしでは活動できない状態になっていると感じました。活動も課題解決の目的を据えたものではなく、週に1回集まって仲間と何かをすることが目的になっているようで、グループ員は、「瞑想がしたい」、「ティラピスがしたい」という発言はあっても、何のためにという意図がないため、ファシリテーターがカルチャースクールの場を提供しているようにも見えました。活動の目的は何なのかを問い、振り返りの時間やグループ員の主体性が欠けている点を現地ファシリテーターに伝えたところ、彼も同じ意見を持っていることがわかりました。

コスタリカの人々は、とても前向きな性格の人が多く、発言もポジティブなものが多く、反省や振り返り時間を持たない傾向にあると感じます。「今回の活動もうまく行ってよかった」と言って終わってしまう中、敢えてネガティブな意見を伝えることが、よそ者の私ができることではないかと感じ、よかった点と反省点を述べるようにしています。連携している農牧省のファシリテーターとも問題点を話し合った結果、もう一度生活改善の基本を振り返る全5回に渡るワークショップの開催が決定し、今実施しています。



写真1：リオグランデ生活改善グループ員と初めて活動した日の記念撮影

ファシリテーターは私の配属先である農村開発庁の他、農牧省、環境省、児童擁護団体などからの参加し、ニコヤ半島生活改善ファシリテーターチームを結成しています。ファシリテーターは自ら生活改善

を実践し改善成功事例を持つ者、JICAが開催する国内外の研修に参加し生活改善に対する深い知識がある者、実際に普及活動経験が豊富な者など、沢山の素晴らしい人材が揃っています。しかし、チーム内で褒めることはしても、おかしいと思ったことを深く追求しないので、もっと自由に意見を言い合えば、もっと良いチームになると感じています。

今、私はグループが皆の力を合わせ課題解決ができるようになり、グループ員の生活の質が向上することを目標に、外国人ボランティアの立場を生かしながら、まずは既存資源であるファシリテーター達がネガティブな意見までも共有できるような人間関係にどうやったら改善できるか、試行錯誤する日々を送っています。



写真集：プロジェクト活動の軌跡



オロティナ市役所、INDER、保健省そしてイフパットからなるファシリテーターチームの結成



モデル集落住民による生活改善の学習
【計8回のワークショップの実施】



8回の研修が終了し、修了証書の授与

個別活動事例



廃材を利用してかまど
の上に屋根、かまど
に煙突

家庭菜園に
観葉植物の
展示。訪問
者が絶えな
い



ヘチマを使っ
て、食器洗い
スポンジと子
供用サンダル
の試作

生計向上を
目指して養
鶏に着手



グループ活動事例



サンタリタの
グループ会
合と高齢者
福祉サービ
スの活動



セバ
ディージャ
スルのグ
ループ会合
と集落清掃
活動



セバディージャ27号線
グループ会
合と廃材を
利用した集落
の看板作成



小学校の生活改善アプローチ始動



数学教師でもある
ベンハミン副
市長のイニシア
ティブで、小学
校で生活改善ア
プローチの授業が
始まる



長野県松川町の皆様、
ご協力ご支援、本当にありがとうございました。



コスタリカ研修員受入時に行われた松川町との交流会



高校生のコスタリカ訪問(オロティナの高校生と交流)

「イフパットだより」に関する照会・連絡先

NPO法人国際農民参加型技術ネットワーク (イフパット)
〒300-1241 茨城県つくば市牧園5-13-203
TEL/Fax : 029-875-4771
E-mail: info@npoifpat.com
ホームページ: <http://npoifpat.com/>